

参考資料 24 不耕起狭畦栽培技術（大豆）

1 不耕起狭畦栽培の特長と留意点

【特長】

- 水稲－麦－大豆の2年3作を想定した技術である。
- 耕起しないため地耐力が高く、排水対策が十分であれば降雨後早く播種できる。
- 計画的な播種が可能となり、栽培面積の拡大が可能である。
- 耕起栽培に比べて地力の減耗が抑制できる。
- 中耕・培土を行わないため省力になるとともに、収穫時には場面が均平なためコンバイン収穫時の土のかみ込みが減少し、収穫ロスや汚損粒が抑制でき、収量・品質の向上が図れる。
- 生育前半の大豆個体間の競合が減少するため、生産効率に優れ増収が期待できる。
- 慣行畦幅に比べて草冠が早く形成されれば場面を遮光するため、雑草抑制効果が期待できる。

【留意点】

- 排水対策が万全でないと湿害による発芽不良をおこしやすくなる。
- 中耕・培土による雑草防除が行えないため、播種前や播種直後の除草剤による防除を的確に行う必要がある。

2 不耕起狭畦栽培技術のポイント

①排水対策

降雨後の播種作業は比較的容易だが、播種直後に降雨が続くと出芽・苗立不良を引き起こす。滞水しやすい土壌では、額縁明渠だけでなく、ほ場内明渠と弾丸暗渠を組合わせた排水対策が必須である。

②土壌改良資材の施用

大豆播種時には堆肥等の有機物や苦土石灰等の土壌改良資材は不耕起のため土壌混和できない。必要な場合は、前作（麦）で予め施用しておく。

③栽植密度の設定

前述の播種量の目安（狭畦）を参考にして、適正な苗立数となるよう株間を調整する。

④雑草防除（使用薬剤や使用方法は最新の農薬登録情報を必ず確認すること）

【播種前処理】

茎葉処理剤を播種前に散布し、確実に雑草処理しておく必要がある。雑草が多い場合はフレールモアなどで地上部を刈り取ったあと10日後に茎葉処理剤を散布する方法が有効である。

【播種直後処理】

播種直後に土壌処理剤と茎葉処理剤を同時散布する。

【生育期処理】

開花期までに雑草の発生が多い場合は生育期処理が可能な茎葉処理剤で防除する。